幼女戦記―コボルトの狂気―

我楽娯兵

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

それは子供の狂気により生み出される動物園。

終戦後、ターニャはタイプライターのキーをタイプし医者裁判に提出する報告書を書き上げる。それはある人物との出会いを書き記した報告書であった。

書き記す人物の名前――ヴォーヴェライト・ジーヴァス。

狂科学者として戦争犯罪者として刑死した医者。

彼が戦時下に行った構想、動物園計画とは――

目　次

コボルト ―― 1
変人の出会い ―― 3
医師 ―― 11
片影 ―― 19
微かな異変 ―― 27

コボルト

敗戦――この二文字はターニャにとっては失業の文字に等しい。
一つの国が敗れ、その国に奉仕していたターニャは野に放たれた殺人鬼と変わらなかった。連合国がターニャを拘束し、長らく身動きが取れない日々から解放された日から民間軍事会社（PMC）を設立し見事な失敗する人生に変わる。
そんな人生の中で唯一、こうして一人の人物の評価を書くというのは初めてだ。
ターニャは古きタイプライターの前で医者裁判へと提出する書類をまとめる。
その人物はターニャと同じ。異邦の世界の稀人（まれびと）だ。
名をヴォーヴェライト・ジーヴァスと云った。
最終階級は親衛隊大佐（シュタンダルテンフューラー）。悪戯妖精（コボルト）の渾名を持ち、すでに解体された帝国研究機関「ツークンフト」の事務長だった男児だ。
「ツークンフト」とは帝国の公的研究機関で、民俗学・医学・オカルトの発展を目的に活動をしていた。恐らく帝国軍部で最も巨大な部署であった。
ヴォーヴェライト・ジーヴァスは既にこの世にはいない。生命の解析の名の下で人体実験を繰り返し、その結果として裁判で死刑を言い渡された。
愚かしい世界を超えた人間。
現実主義者（リアリスト）であるターニャとは違い、ヴォーヴェライトは夢追い人、夢想家（ドリーマー）だった。
この故人は夢想家ではあったが、突拍子もない理論で人を実験には使わなかった。
理性と倫理と道徳を持って、理論的に人を実験物に使用していた。
彼はいつの時代に措いても理解されない。先を行過ぎたのだ。
〝我々〟の知識がこの世界の世情に合わず、ヴォーヴェライトは狂科学者（マッドサイエンティスト）として処断されてしまった。
こちらでは革新的なX線撮影、感染症の抗生剤の開発、臓器移植。

果てのない生命解析探求を行えるだけ行ったのだ。故に倫理を理解しながら、倫理に反した。
悪名高い構想計画は知っているはずだ。
ＩＬＱ（イルク）構想――革新（イノベーション）・生命（ライフ）・探求（クエスト）と多方面から人の魂と呼べる部分を探求していった構想の名前だ。
探求とは名ばかりの生命の冒涜行為を繰り返していたのは事実だ。
実際に行われた例を挙げよう。
脳が生じさせる微細電流を他者と共有させる事で人格統合を為す、「ゾンビ実験」
機械と肉体を融合させより高次元の運動機能を得る、「ハダリー計画」
近親間で人工授精を繰り返し無数の障害奇形児を生み出した、「アダムとイブ計画」
無数の命が彼の好奇心で生命を奪われ、もしくは人生を狂わされた。
帝国の中で惨澹たる戦争犯罪者たちと肩を並べるヴォーヴェライト・ジーヴァスは刑死する前、こういった言葉を残した。
――この世は愉しみ尽くした、この先があるならまた楽しもう――
死を目の前にした者とは思えない表情で、死刑の方法を要求する度胸。
狂かれているの一言だ。怪物と呼ばれたターニャとはまた違う怪物。
理智の怪物といってよかった。
この報告書類では読み手が最も欲しがる構想計画の内容を、ターニャが見てきたすべてを書き記そう。ヴォーヴェライトが目指した夢想の果て。
――動物園計画の内容を。

変人の出会い

それは肌寒さを感じ始めた季節だった。
フランソワ共和国との対立が本格化し始めていた時期だ。
帝都ベルンの一角にあるカフェテリアに呼び出しを受け、私は待っていた。
戦局の悪化によりけっして宜しくはない食糧事情に、かなりの席数があるカフェテリアにも拘らず客は疎らで閑散とした雰囲気。
前線より唐突に後方へと呼び戻された私は、参謀本部に着くなり上官に命令書を投げて渡された。命令書の内容は前線に赴く従軍医団の護衛と云う内容であった。
従軍医団といってもそういった技能知識を会得している経緯を持っている者は片手の数もいない、現場経験を積ませるためだ医大生など従軍医補佐が殆ど。
個々人の評価表はもらってはいるが誰も普通。
人を治療できるという特殊技能を除けば大半が民間人だ。
こんな者たちに銀翼突撃章を持つ軍魔導士官を付けるとは大仰な事この上なかった。
まあ、護衛するのは前線まで。大切に送り届けよう、送り届けるが

「どうしてこうも時間にルーズなのだ」
軍役に就いていないにしても社会人として遅刻はいただけない。
ただ単に医者と言う人種がそういったものなのだろうか？　いや国民性として遅刻するぐらいなら一時間待った方がいいと言う国だ。
時間は無限だと考えているのだろうか？　そんな馬鹿なことがあるか。
時間は有限だ。人生という絶対有限時間をどれだけ有意義に、価値の在るものとして消費するかが人生の命題だろう。
それを戦時下という徒でさえ生き難い世情で、無意味に時間を消費する行為が信じられない。生きている意味なしだ。
即刻弾劾してやりたいが、残念ながら相手は軍医だ。

今回護衛を賜った軍医団は元が民間人の上に、上官としての階級を与えられている。
そもそもの命令系統も違いこちらからどうこう言ったとしても、あちらが変える気が無ければどうしようもないのが現状。
ある程度の身辺保護の都合上の命令は従って欲しいが、これでは望み薄だろう。
懐中時計を見て時間を確認、そろそろ五分を過ぎようとしている。
捜索願でも出すべきか。近頃は帝都の治安もよろしくなくゴロツキが医師団の道具を密売目的で強盗を働いている可能性もある。
動こうかとしたときに一人目が現れた。
着慣れぬ軍服に股ずれでも起こしたのか歩き方が変であった。
軍医の腕章を付け少年。当時の私と同じぐらいだろう。
艶やかな栗毛に淡褐色の瞳、血色の良い垢抜けない顔つきが印象的だ。
ふわりと香る匂いに、気が抜けそうになる。不快な匂いではない、心地良い匂いといっていい。どこか落ち着く甘い匂いが彼を中心に漂っていた。
カフェテリアのトレーを両手に持ち、その上には湯気が立つコーヒーと胸焼けを起こしそうな甘ったるいワッフルがある。
「まだみんなはきてないの？」
「……」
その少年は正面の席に座り、ワッフルを食べ始める。
腕章を見る限り、医官大尉であると証明されている。同年代で上官と言うのは少々信用できない。誰かの七光りか、変に勘ぐってしまう。
「ここのワッフルはすっきりした甘さで美味しいんだ、珈琲も工場の廃液みたいなただ苦くって臭い豆の絞り汁じゃないんだよ。少尉殿？」
「失礼ですがお名前をお聞かせ願いますか？」
私がいくら若年で物覚えがいいといっても、半日前に渡された個々人の評価表の内容と人物の名前と顔を一致させるのは苦労する。

少年は信じられない速さでワッフルの一枚目を平らげ、名乗った。
「ヴォーヴェライト・ジーヴァスだ。ターニャ・デクレチャフ少尉、君のブロマイド持っているよ」
「光栄です」
「本の冊子に丁度いいんだあれ、スカート姿の君似合ってなかったねえ、あれじゃあ一種のアイドル？　いやアイドルなら楽しくやるか。こんちくしょうって雰囲気が写真越しからも感じ取れたよ。君みたいなお人形さんは尚の事雛形になりやすいだろう。興味は薄いが応援するよ」
出会い頭に失礼な事をすらすら言う奴であった。
スカートやあの姿は不愉快極まりなかったことは確かだが、これを本人の目の前で慎み無く言葉にする人間はいなかった。
落ち着きなくワッフルを平らげ、ヴォーヴェライトは珈琲を一口のみ息をつく。
「すまない。抗不安薬と催眠剤の影響だ、饒舌になっている」
「持病ですか？」
「いや違う、帝都に召還されて来る方法が飛行機しかなくてね。私は高所恐怖症で、気絶か眠っている状態でないと飛べない。それでこうして催眠剤と、起きてしまったときのために抗不安薬を一緒に飲んでいる。け、けけ、け、結果としてこういった症状が出てきてしまっている。くそっ口渇まで出ている。」
この様子を見ていてこの医者には罹りたくないと心裡で思う。
見る限り信用に値しない。私も言えたことではないが、ヴォーヴェライトは身体的に若すぎだ。
医者とは人の命を預かり延命させる仕事だ。それをこんな少年が執り行うなど、憚らずに言ってしまえば、もう少し経験を重ねてからでないと御免被りたい。
私もそうだが、帝国の人事は幾本か理性のネジが飛んでいると言わざる得ない。有能な人材を率先して登用するのは状況として理解しているが、限度があるだろう。
「ヴォーヴェラ博士！　もう来ていたのかい！」

「おお、ヨーゼフ。君もか!!」
ヴォーヴェライトは席を立ち、手を振った。私は振り返りそれを見た。
軍服の医師。三十代のふっくらとした体型の成人男性。
彼は小走りに駆け寄って来た。
両手のボストンバックからはガチャガチャと喧しい音が立っている。
顔立ちは整ったハンサムで、優しげな眼差しでヴォーヴェライトと抱き合い再会を本心から喜んでいるようであった。
彼は評価表を見る前から知っていた。医学界にそれなりに名の知れた医者であり、私が協商連合との戦闘で負傷した時に執刀を担当した医師だ。
「遅いじゃないか、ヨーゼフ。同志は待ちくたびれているぞ」
「いやいや、すまない。昨日は急患があってねえ寝不足だよ」
「お得意の接合手術か、〝今回〟は君の力が必要になってくるぞ!」
「はははは、嬉しい限りだ。祖国を護る免疫へいしを助ける為だ。苦労は惜しまないさ」
父子程に年齢の離れた二人は笑い合い、ハグを交わし合っていた。
どういった繋がりで彼らは知り合ったのか。ヴォーヴェライトの経緯でそれと云った輝きはなく、帝国の医学生という平凡なもの。
対するヨーゼフはそれなりに名の知れた医師、教鞭を取る事はあるだろうがそれにしても彼らの接し方は生徒と教諭というより、友人といった雰囲気だ。
一頻り笑いあった彼らは落ち着きを取り戻し、ヴォーヴェライトが私を紹介した。
「ヨーゼフ、見たまえよ。かの銀翼突撃章を持つ、ターニャ・デクレチャフ少尉だ」
「久しいよ、幾久しいよ。デクレチャフ少尉！　銀翼突撃章を頂けたそうだねえ。いやはやこの世は奇縁であるなあ」
「こちらもまた会えて光栄です。ヨーゼフ博士」
ヨーゼフ・メンゲルベルク大尉。接合手術の指揮者と呼ばれた方

だ。
過去に徴募組でヨーゼフ医師は義務兵役に就いている。
医師としての素質を見込まれ東部戦線で実績を上げている。
東部戦線時に負傷し、前線任務に適さないと判定され後方の軍病院勤務だった筈だ。
にこにこ顔のヨーゼフが握手を求め、私は素直に受けた。
体温が高かったのを覚えている。後方で肥えたのか嫉妬心を覚えなくはないが、彼とてそれなりに実績があり、帝国では指折りの医者であろう。
カフェテリアのカウンターに向かったヨーゼフは節操無く、ビールを頼みだした。
私もこの行為には呆気にとられた。
いやいや、待ってくれヨーゼフ医師。
アナタは今遅刻してきましたよね？　遅刻しておいって飲酒までとはどういう気なのですか？　軍役に就いていたのなら規律は守って貰えませんか。
彼はジョッキを煽り、至福いった表情を浮かべていた。
この国の特性に漏れずヨーゼフ医師はビールが血管の中を流れている。
肥えた腹は呑みすぎが原因か？　それ以前にだ。他の医者どもは何をしているのだ。
心の中でひとりごちる私のヨーゼフ医師は読み取り一つの便箋を取り出した。
参謀本部の捺印の入ったそれをヨーゼフ医師は差出ってくる。
「忘れてたよデクレチャフ少尉。ライン戦線に向かう従軍医団の輸送は前倒しになったそうだ」
「はっ？」
「前倒しだよ。昨日の段階で僕とヴォーヴェラ博士以外はライン戦線に前乗りで合流しているそうだ。僕たちがベルンに入ったのが記録に残っていたから、君が回収しに来てくれた訳だ」
……。

という事は私は手違いの忘れ物を回収しにここで待されたという事か。

――――……。

……私が護衛する必要はあったのであろうか。

ヴォーヴェライトとメンゲルベルク大尉の振舞いを見ていては、私の毒気が抜かれかねない。さっさと行動を起こしライン戦線に向かうべきだ。

「せっかくのベルンだ。ヨーゼフ昼食でも取って向かうか」

「賛成だね。いいラム肉を扱っている店があるんだ。どうだねデクレチャフ少尉」

勝手に昼食の予定を立てないで頂きたい。

当初の予定行路は人数の激減で予算は浮くが、人数が少ないなら少ないで西部方面への移動方法を検討しなければならない。

手っ取り早く鉄道というのも一つの手だ。

最も高速かつ効率的な移動手段ではある。あるが乗車するのは少々骨が折れる。

外地に向かう車輌は基本として新兵など、出兵へ向かう者たちだ。

活きの良い糞が蚤まみれの車輌に所狭しと押し込まれているのだ。

上も下も正しく理解しているかも判らない新兵と、緊張感に欠ける高級士官を同じ場所に滞在させるというのは、互いの精神的にもそうだが、医者として衛生的にも倦厭すべきだ。

ふと顔を上げる。

眼前にいたはずの二人は、かなり遠くへと移動してた。

本当に勝手な行動ばかりする医者達だ。

ふらふらと歩いたのだろう、屋台の一つに足を止めており昼食をどれにすべきかと吟味していた。駆け足で彼らに追いつく。

「お二人方勝手な行動をされては困ります」

「ヨーゼフ、これは旨そうだ」

「おお、相変わらず舌と鼻は良好のようだ。この屋台のケバブは絶品だ」

「少しばかりケッチャップの量が多いように見えるがなあ」

「これが適量なのだよ」
「……」
二人は既に私の存在は眼中に無く、屋台でとる昼食を真剣に考えていた。
結局二人とも大量のフライドポテトとケバブサンドを頼んだ。
そろそろ私は憤慨する二十秒前、余裕を持っても三十秒前だった。
私の分のケバブも渡されたが、飴玉を貰って喜ぶ純朴な精神は生まれる以前に失っている。だから私は軍人になったのだ。
苦労人が馬鹿を見ているような、そこはかとない理不尽を感じなくもなかった。
このケバブサンドを顔に投げつけたらスッキリするだろうか。
煮詰まり茹蛸のように膨れていた私に、彼らは意外な事を言い出した。
「そうそう、移動手段を確保しておいたよ」
「はっ？」
ヴォーヴェライトは口一杯にケバブサンドを頬張り、行儀悪く話した。
「君が考えあぐねてる時にねえ、西部方面に牧場を持っているトラックがあった。出荷も終わり帰りで、荷台が空いているそうだよ」
「ジーヴァス大尉、あまりにも危険なのでは？」
「闇市のグループを気に掛けているのはわかるが、普通の尉官がトラックの荷台に乗るかね？」
確かに乗りはしないだろう。だが安全性を考えても避けるべきだろう。
意見を口にする前に、彼らはそそくさと移動しトラックの荷台に乗り始めていた。
荷台には、先客が一匹と無数の荷物があった。
ヴォーヴェライトは先客の子ヤギを抱きかかえながらゆったりと座り、メンゲルベルク大尉は腹の肉を突っ返させ転がっていた。
降りるようにと言おうとするが、それは喉元で止まった。
荷台の荷物はすべて医薬品。帝国印の既製品ばかりであった。

「タイミングが良かった。ライン戦線に医薬品を届けるようにと兵站部に言っていたんだ。これに乗れば妙な手続きも、検問もすべてフリーパスだぞ少尉」

健やか笑顔でヴォーヴェライトは子ヤギのすべらかな毛並みを撫でた。

その雰囲気は子供の無害的なものではなく、計算高い知性を得た知的生命体であった。それは当然であった。

彼は、ヴォーヴェライト・ジーヴァスは、

従軍医団を総括する隊長を勤めていたのだ。

医師

頬に当たる空気は冷たく、時折地上で輝く爆発の光が顔を焼いた。
空は地と違い、静謐な世界が無償で提供され、地には雑多な地獄が広がっていた。
私がライン戦線に配属され、時間は笑い話にもならない速さで経過した。
あまりの速さに自身でも驚きを隠せず、アインシュタインの相対性理論のように楽しい時間と苦痛な時間の認知的時間の差異を確かに認識していた。
このライン前線の従事は楽しいかと言われれば楽しくはないのだが、速く感じさせる要因は多くある。
要因の一つとしては、先日私が壊滅させた魔導中隊だ。
フランソハ魔導中隊の喪失が大きく、敵の士気は眼に見えなくとも、敵の動きの節々を注意深く観察すればサインを捉える事ができる。子供でもできる簡単なことだ。
もう一つが、検診を受けられるようになったという事だろう。
ヴォーヴェライトの率いる医師団の合流に、兵士達の精神的余裕が生まれた。
後方に比べれば格段に劣るが、東方や南方に比べれば上等な治療を受けれる。
治療と言っても医者自ら切り傷の消毒と、弾傷の縫合くらいだが。
何のことはない治療だが、「医者」自らという点が重要なのだ。
西方にヴォーヴェライトが医務にいると、北方や東方の軍医が如何に怠惰だったか体感できる。
処方する薬はマーキュロクロム液で「自分で塗れ」と言われない、検診治療を看護師に任せっぱなし、負傷兵の前線勤務可能か不可能かの判断。それだけしか行わない無能共より、彼らは兵士達に精神的安心感を与え落ち着かせている。
精神の安定はどんな現場であっても重要だ。
余裕が在り過ぎ脱力するのはいただけないが、張り詰めすぎればい

つかは破裂する。
それが連鎖事故（チェーンアクシデント）のような惨事になりえる。
温かい食事睡眠と献身的な医者の対応、僅かな嗜好があれば人はある程度は持つ生物なのだ。それをうまく理解し利用できないような軍隊が兵士を駄目にするのだ。
身体的不安、そして精神的不安。医師は体を救い、罪の意識に神が巣食う。
無神論者であった私には「神」は逃げ口実、よく出来た正当化された精神疾患と同じだった。存在Xに出会うまでだが。
「C P（コマンドポスト）。こちら第三小隊、敵砲兵小隊が攻撃を開始した」
『――C P（コマンドポスト）確認。第三小隊、対地攻撃準備。……――命令が受諾された攻撃を開始しろ』
「第三小隊確認した。攻撃開始（アクション・スタート）」
さあ皆さん笑いましょう。
私達は天使（タナトス）であり悪魔（アバドン）、地を這う蟲を嘲笑う航空魔導師である。地上の道化に銃弾の賛辞を贈ろう。
「各自確認（アイ・コッピー・ユー）。ただいまより地上攻撃を開始する。命令確認（ユー・コピー・ザット）」
『了解（アイ・コッピー）』
第三小隊は銃口を地上へと向ける。
私達は盲信する機械であればいい、忠義の為に、大義の為に、そして我らの為に。
ジークライヒ、黄金の時代を。

戦場には似つかわしくない軽やかなクラシック音楽が聴こえた。
どこか寂しげなで、平坦な曲徴。
落ち着いたテンポのピアノ音響が、検診を受けている者のみならず周囲の物さえも戦場の興奮に静かで緩やかな弛緩をもたらした。
私は音に釣られ音楽を流すテントへと向かう。幸いな事にそのテントは私が目的としていたテントでる。
そのテントは他よりも大きいもので張られたものだった。テント

の前には白い子ヤギが退屈そうに座り込み、ちびちびと水飲み皿に舌を着けていた。
　ふわりと漂う甘い香り。その匂いはまるで砂糖たっぷりのミルクティーを思わせる、刺さるような甘さではなく、軽く滑らかな匂いだった。
　テントより出て行く者がいた。それは私の部下であるヴィクトリーヤ・イヴァーノヴナ・セレブリャコーフ伍長であった。
　憑き物が落ちたようなスッキリした顔付きで足取りも軽い。
　彼女は戦闘行為を避けるきらいが在った。私が医師団が定期的に行う心理カウンセリングを受けるようにと言っていていたが、あの様子は効果はあったようだ。
　私はテントの中へ足を進める。
「失礼いたします。ジーヴァス大尉」
「うん？　珍しい患者が来たな。好きに座りたまえ」
　私は彼の近くに置かれた椅子に腰掛ける。
　眼鏡を掛けたヴォーヴェライトは私の顔をちらりと見た後、すぐにカルテにペンを走らせ検診結果を汚い字で書き込んでいった。
「人のカルテを覗き見るのは感心しないな」
「いえ、すいません。部下の名前だったもので」
「ふーン…、セレブリャコーフくんがねえ。心理診断でも見るかい？」
　ぱらぱらとページを捲り、新しい紙に心理診断のページの字を綺麗に書写していく。
　その行為に私は引っかかってしまう。初めから読める字で書いていれば紙の節約になったものを、非効率な行動だった。
「失礼な事を考えてはいけないよデクレチャフ少尉。これはセレブリャコーフくんの個人情報（プライバシー）を護る為だよ」
「カルテを汚く書くことがですか？」
「カルテは一個人の身体情報のすべてを記した一時的な説明書だよ。それに加えこれは心理診断の結果も書いてある。内に敵がいないことを信じたいが彼女は肉付き（グラマー）が良いだ、男性的欲望を刺激してしまう。襲われない為にも汚く書いて私以外には読めないようにしない

とね」
「カルテは数字や文字でしょう。写真があるならまだしも」
「人の欲を舐めてはいけないよ。特に感情と自己顕示欲が結びついたものは実に厄介になる。一塊になってしまえばそれにとって一個人の情報全てが興奮の一匙に変わる。文字でも数字でも臭いでも、音でさえもだ」
「酷く歪んでおりますね」
「俗に言うストーカーだよ。あらゆる個人情報が視覚的聴覚的に精神幸福に繋がるのだよ。起因は恐怖でも性欲でも精神疾患でも変わらない」
セレブリャコーフの精神状態を書き記したカルテの一枚を私の前に出した。
他者への依存傾向ありと。精神的支柱、上官への不信感を隠しながら盲信することがセレブリャコーフの精神衛生を保っていると私にも分かりやすく書かれていた。
上官への盲信という事は私がセレブリャコーフの精神的支柱という事だった。
信頼されるのは好ましい事だ、出世のいい証言者となりえる、が。
「上官への不信感とは？　何のことでしょう？」
「さあ、君自身に訊きたまえ。私は未だに君の検診はしていないのだからねえ」
彼の態度はどこか軍人らしさはなく、医者と言った雰囲気でもない。
良き友人としてこの場に居座っている。首より提げた十字架が医者と言うより神父の様相を醸しだしていた。
そのせいかヴォーヴェライトのカウンセリングはライン戦線では特に人気であった。
彼のカウンセリングは時折、甘味を提供するという話で定期的に行われるがそれ以外に足を運ぶものも多いと言う。テントの端に山積みにされた心理診断書はそのせいであろう。
心理カウンセリングは兵士を後方に戻す第一ステップでもあり、後

方に戻った兵士達の社会復帰支援の為だ。戦場と言う非日常から平和な日常へと戻った兵士達の反動は凄まじいものだ。銃や死に掛けの仲間を持っていた手に、矢庭にペンや紙を、除隊したものには鍬や仕事道具が。体と同じだ、縮んだ胃袋に大量の食物を流し込めばどうなる？　――吐き出す。自然の摂理だ。

精神も同じ、非日常から日常への帰還はＰＴＳＤ（トラウマ）や浮浪者となりうる。そのために帝国は早くから戦場でのカウンセリングを行っている。

非日常の中で日常の帰還に対する余裕を持たせ、除隊したものでも食物生産を担う国力にするためだ。

彼のカウンセリングがどれだけの精神保養になるかは知らないが、甘味を求めてだけではないだろう。他の兵士たちの憑き物の落ちた表情を見ればわかる。

ヴォーヴェライトはペンを置き、小さな溜め息を付いた。

「少々疲れてしまった。君の検診は後でいいかい？」

「お気遣いなく。隊員の精神状態を確認しに来ただけですので」

「心優しく利他的なことだ、お茶でも飲むかい？　珈琲がある。味は保障しないが」

「戴きます」

検診台の横にある戸棚よりヴォーヴェライトは二つのカップを取り出した。

カチャカチャと鳴る金具をカップの上に置き、荒挽きの豆を注いだ。

「それは何です？」

「ん？　珍しいかね。これは東南で行われる珈琲の淹れ方だよ。ペーパーは資源の浪費だからねえ、ネルは神経を使う、金属フィルターは洗えるし繰り返し仕えるし色々と容易だ」

湯を注ぎ、珈琲の濃厚な香りが漂う。

ヴォーヴェライトより匂う甘い香りと交じり合い、戦場とは別の後方の喫茶店でもいるように錯覚してしまう。

「味は重いぞ、ざらつきもある。コンデンスミルクはいるかい？」

「いえ、そのままで構いません」
「おお、チャレンジャーだ」
検診台に置かれたカップの一つを取り口を付ける。
「…あ」
少々私は驚いた。
ヴォーヴェライトの言うとおり、味は重く舌にざらりとした感触はあった。
しかしそれ以上にこれは飲める珈琲だった。
こちらで飲んだ泥水同然の豆の絞り粕とは違い、カフェインの苦味をキッチリ嗜好品の域にまで達している。
感動だ。まさしくこの感情は感動だ。
ここまで歓喜した事は前世今世の中でも人生少ないだろう。
「気に入ったようだね」
「大尉殿は帝国の中でも味の良し悪しをちゃんと理解しているようですね」
「今は非常事態だしねえ、腹が膨れればいい見たなところがある。デクレチャフ少尉はどういった生い立ちで？」
「孤児院の出で、まともな食事は」
「そうか。…私は良かった一般階級の家庭で生まれたのだがねえ。父親はクソ野郎だったよ」
ヴォーヴェライトは快活に笑った。
虐待されたと言う意味なのか。その割には陰りや身体的な傷跡は一つとして見えない。ヴォーヴェライトの姿は子供では在ったが、私のように精神的には成熟を果している。出世に息巻く私とは違い、楽しげに苦労も何も知らず生きる類の人間だ。
「大尉。質問をよろしいですか？」
「私は軍医だよ。神父と同じく誰にでも受け入れる度量はあるよ」
「それでは……、大尉はどうして医師を目指したのですか？」
「う～ん？　本職は人を治すと言うよりは生物体の正常な形態と構造を調べる分野なんだけどねえ」
「と言いますと？」

「解剖学が専門だよ。ここに派兵されたのもフランソワの魔導師にやられた君達を解剖する為に居るんだけどねえ。心理学も修めておけば経歴に箔が付くからさ」
ヴォーヴェライトはカップを置きカルテに向かう。
最後の一枚のようでペンは軽やかに動き回り、薄茶色の紙に字を滲ませる。
「人を治したいと言う意思が無かったといえば嘘になるが、解剖学の方が興味があったんだ」
「解剖学とはまた特異な好奇心ですね」
「ふふ、昔にねえ。祖母の家に遊びに行ったんだ、それは田舎の家で鶏なんかを飼っていたんだ」
彼は昔話を楽しそうに話ながら、解剖学者を目指した経緯を話す。
「年寄りは子供が来た事が嬉しいだろ、それで祝う為に鶏の一匹を鎌で絞めたんだ。首を持って鎌でスパット切った。私は鶏は地面に落ちて死んだと思った、でも違ったよ。鶏は首が無いまま二メートルほど走り回って死んだ、それからだ」
「――なかなか、変わった理由でありますね」
「子供ながらに気になったんだろうね、人もああなのかって。怖いとか気持ち悪いとか思わず、面白いって思ってしまったよ」
首を失い数週間の間、栄養素を注入して生き延びた鶏の話がある。
それに類似しているが、それがヴォーヴェライトの解剖学者を目指した理由だとしたらそれは、
――かなり歪んでいる。
ただ単に命の構造を知りたいと言う探究心から、死後の体を切り開いているのだ。
褒められた理由ではないだろう。
「おや？　ターニャくんではないか」
ふと現れたヨーゼフ大尉が大きな死体袋を二つテントの中に担ぎこんできた。
黒の死体袋、敵国の魔導師が詰め込まれているのだろう。
「ようやく今日の本職だ。デグレチャフ少尉、すまないね今日の検診

は終わりだ」
「いえ、こちらも長居をしてしまい失礼を」
「君ならいつでも歓迎だよ。そうだろうヨーゼフ」
「ああ、彼女は聡明だ。これの理解も早いだろう」
医者二人は死体袋を二・三度叩く。
解剖学の理解、という事なのだろうか。出来る事なら御免被りたい。
死体の匂いほど嗅ぐに耐えない匂いはない。
ヴォーヴェライトは診断書の山よりいくつかの心理診断書を取り出した。
「これと…これだな。君の部隊の心理診断書だ、君が求めていたのはこれだろう」
「ありがとうございます」
「また来てくれ。美味しい珈琲を振舞うよ」
ヴォーヴェライトの屈託のない笑顔が私を歓迎していた。
人生を全力で楽しんでいるようであった。彼ら二人は死体袋をサンタクロースのプレゼントをこっそり開ける悪ガキのようにテントの奥に引っ込んでいった。

片影

私はヴォーヴェライトの診療テントに来ていた。
今回は隊員の精神状態をチェックする目的ではなく、付き添いとして着ていた。
その男性隊員、アーリンゲ伍長は数週間前より酷い抑うつ状態に悩まされていた。
付き添いなど個人判断で診断を受けて欲しいのだが、彼の場合は自分自身がうつ状態であることを認めず、診療を拒否し続けていた。
これ以上の検診拒否は今後の作戦にも影響が出る可能性がある。と言うよりもう出ていた。その為に私が付き添う事で無理やり検診を受けさせているのだ。
「酷い抑うつねえ。原因ははっきりしているだろうが……話せるかい？」
「……いえ、今は……」
「そうか、ならそれでいい。現状君が抑うつ状態にあることは上司であるデクレチャフ少尉や同僚のセレブリャコーフくんから報告が来ているが。休暇は取る気はないのかい？　病気帰還するならばここで私が一筆するだけで後方に一時的に精神療養で戻れるが」
「いえ！　それは、それだけはやめてください」
後ろで見ていた私はアーリンゲ伍長の反応に少々驚いてしまう。
精神貧弱かと思っていたが、戦場に止まる覚悟はあると言うのだ。どこから来る言葉なのか、今の状態が魔導中隊の連隊を少なからず崩しているのだから、潔く後方に下がってもらった方がこちらとしても有り難い。
ヴォーヴェライトはさらさらとペンをカルテに走らせ置く。
「侮辱じゃないよ。君は何故そんな状態になってまでここに居たがるんだい？　後方に下がったほうが部隊の為だろう？」
「俺は……。俺はもう祖国に命を捧げました。おめおめと辱を晒して戻る事は出来ません！」
「アーリンゲくん、君はなかなかの愛国者のようだ。その精神には脱

帽だなあ」
それだけの愛国心があるのなら闘争心へと変換してくれないものか。
気概があっても実行できなければ内弁慶だ。
私はヴォーヴェライトが淹れた珈琲を一啜りし、ヴォーヴェライトの検診風景を眺め続けた。
「気にも心構えに応じてここに留めておきたいが、その判断は誤れないのが私の仕事だからねえ。善処はしよう」
「あ、ありがとうございます」
ヴォーヴェライトはアーリンゲ伍長の心理状態をカルテに汚い字で書き込み始めた。
「現状君が発症している症状は抑うつ症だ。人としての正常な精神反応の一つだ。気分が酷く落ち込んでやる気が無くなって、行動、感情、幸福感なんかに影響が現れ始めている。現状ではどのように感じる？」
「はい……確かにそういった感じはあります」
「そうか……自分自身で判る範囲でいい。言い辛い、事や言いたくない事はいわなくていいから、その原因はなんだと思う？」
「……多分、多分です。同期が戦死してしまった事だと思います」
「戦死……　ふむ。苦難を共にして来たんだ、その悲しみは正しい反応だよ」
「それで……いつか自分もああなってしまうのかって、自分もいつかトーチカの中で肉片になっちまうっじゃないかってッ!!」
アーリンゲ伍長は泣きそうな声で叫んでヴォーヴェライトに訴えていた。ヴォーヴェライトはその叫びに真摯に向き合い、しっかりと聞いていた。
「人生の出来事とは苦難と快楽の繰り返しだよ。仲間の死は不幸が重なってしまっただけだ。君が思い悩む必要はないんだよ？」
「で、ですが。あの時俺が止めていれば――!!」
アーリンゲ伍長は口篭もってしまう。
ヴォーヴェライトは幼子に優しく連れ添う神父のように訊く。

「それは話せるかい？」
「――あ、う、ぁあ」
　言葉がうまく出ない様子のアーリンゲ伍長にヴォーヴェライトは眼を細めた。少しだけ息を吐きだし、椅子の背にもたれ掛った。
「デクレチャフ少尉。テントの入り口でマスコットをやってるヤギに餌と水を与えてくれないかい？　食料はヨーゼフに言えば用意できる」
「ヤギに餌をですか？」
「上官命令だ。さ、行った行った」
　ヴォーヴェライトはそう言い。私を追い払うようにテントの外に追いやった。
　外に出された私はぽかんとしてしまう。これでは隊員の心理的疾患の治療風景を見れぬではないか。口惜しさあった。
　入り口のマスコット、白ヤギの「メリー」と呼ばれるヤギが私の足に擦り寄ってきた。純粋な眼で私を見つてくる。
「餌の分際で高待遇だな。メリー様」
　皮肉を言わずにはいられなかった。

　餌を貰い戻ってくる頃には既に検診は終わっており、ヴォーヴェライトはゆったりと珈琲を飲みながらカルテに目を通していた。
「ジーヴァス大尉。アーリンゲ伍長の完治は何時ほどになりますか。元より彼は幾度か兵役免除の身であったのを自身の希望と無理に兵役についてます」
「だから身体的精神的に不備があれば後方へって？　可哀想なこと言うねえ君は」
　ヴォーヴェライトはカルテを置きレコードプレーヤーから流れるオペラ音楽を肌で感じるように、片手をレコードプレーヤー向けていた。
「可哀想も何もありません。ここは戦場です、使えぬ者は早々に死にます。死ぬだけでも数枚の書類紙を消費し、後方では棺桶に使われる

木材が浪費される」
「人を物としてみるのは悪い癖だよデクレチャフ少尉。人は多きを消費するが、多くの物を作り出す。形在る物無い物さまざまに、それに彼は魔導師だ。死んだら私たちの研究に協力してくれる」
「なにを言っているのです？」
「彼がここに来る前にこれ文面にして持ってきた。――私、アーリンゲ伍長は死後帝国の研究機関に遺体を提供する。――右親指の拇印付だ、馬鹿な人だ」
「何故アーリンゲ伍長はそこまで固執するのです。後方勤務のほうが身の為でしょう」
　関連資料の一枚をヴォーヴェライトは引っ張り出してきた。その資料はアーリンゲ伍長の家庭内環境の資料だった。
「虐待だ、酷い仕打ちを受けていたようだ。それから抜け出すために軍に志願していたようだ。帰りたがらない理由はこれらだろう、精神的なもので後方に戻されたなど笑い話にもならない。それを恐れている」
　確かに精神疾患で戻された兵士は少なからず後ろ指差されることはあると訊く。
　他の後方に戻る兵士たちは負傷や死傷なのに、自身は軟弱な精神だった為に戻ってしまった。
　自責の念と他者の蔑み。どれだけの恥か。
　それだけの共感精神を生憎と持ち合わせていないのが私だ。
　さっさと後方に帰っていただきたい。
「彼の抑うつ症の原因を聞いたんだがねえ。原因はどうにも君にあるようだ」
「私が、ですか？」
「うん、君、最近自分の部隊の兵士を二人ほど異動させただろう。名前はなんだったかアーリンゲ君と、セレブリャコーフ君と同期だった」
「ハラルド・フォン・ヴィスト伍長とクルスト・フォン・ヴァルホルフ伍長でありますか。彼らは既に戦死しております」
「それが原因だ。私も聞いたよ。う・わ・さ」

「噂？」
「死にたがりを棺桶に叩き込んだって？」
どこから流れたのか。ヴォーヴェライトは咎める様子も無く訊いてくる。
観念するしかないようだった。
「確かに噂は的を射ていますよ」
それを訊いたヴォーヴェライトは咎めるどころか、よくやったといった表情を浮かべ冷めかけの珈琲に口を付け健やかに笑う。
「君も罪深い。でもせめて形の残る死体の作り方は出来ないのかい？
彼らのパーツはトーチカの中で判別困難状態（ホワイトパズル）だったんだよ。縫いあわせる身にもなってくれ。眼も疲れるし、苦労したんだぞ」
「それがジーヴァス大尉の仕事であります」
私は彼と話していて判ったことがあった。
ヴォーヴェライトは私と同じで、目的の為なら人の命が砂粒ほどの価値に代えられる価値観の持ち主であった。
私は後方勤務のために、部下たちを使い昇進を図り、戦果を挙げている。
ヴォーヴェライトは何らかの理由で、人を解剖し、笑って生命を冒涜している。
その理由が「鶏の頭」のような歪んだ理由で、私たちにメスを向けないでいる事に安堵と不安感を与えてくる。
珈琲を飲みきったヴォーヴェライトは一息つき、徐に訊いてくる。
「生理は女性魔導師の飛行能力に影響を与えるって本当かい？」

その戦闘は私がライン戦線を離れる二ヶ月前に起こった。
いつも通りの鉛色の雲を駆け抜け、地上攻撃を行っていたところ、フランソワの魔導小隊と遭遇し戦闘が始まった。
先の戦闘で私がフランソワの魔導小隊を撃墜した事で、航空戦はめっきり減って少々気が抜けていたところでの戦闘だった。
多少の混乱が私の部隊で起こっていた。敵（フランソワ）がこうも早く魔導師

を投入してくるとは夢にも思わなかった。
私の後ろにしつこく張り付いた魔導師に手間取り、部下への気配りが行き届いていなかった。
僅かに加速が、敵はしっかりと付いてくる。
かなりの速度であったがエレニウム九五式にも引けを取らない速度で付いてくる。
恐らく新型宝珠の実験部隊であった。だが場数が足りておらず、稚拙な飛行技術が目立ち、それにつけ込むことは容易であった。
意図的に失速（ストール）を起こし、敵の後ろに回りこんだ。
後は簡単だ。術式を練り込んだ弾丸が放たれ、新型宝珠もろ共粉々にしてくれた。
『各自確認（アイ・コッピー・ユー）。現状報告』
個々に報告を寄越し、無傷や軽傷といった声が回ってくる。
その中でたった一人だけ報告を寄越さない奴がいた。
『アーリンゲ伍長。どうした？　報告を』
アーリンゲ伍長のチャンネルに回線を合わせ話しかけるが、何も返ってこない。
勤勉なアーリンゲ伍長に限って敵前逃亡なんてことはないだろう。
という事は残る可能性は――
「小隊長！　あそこ――」
私の側に戻ってきたセレブリャコーフ伍長が地上に指差した。
指差した先には敵に追われるアーリンゲ伍長の姿がある。
非常に低空を飛行しており、上を取られヘタに頭を上げられない状況にある。
「小隊長、支援を！」
「各員、支援行動（レスキューアクション）」
小隊全員が高度を落し、敵の頭に向かい急降下（イーグルダイブ）を掛ける。
私たちが発砲し、敵が私たちに気づいた瞬間に、引き金が引かれた。
敵の弾丸はアーリンゲ伍長に向かい放たれた。
防殻を張ったアーリンゲ伍長だったが、弾丸は防殻は接触したとたん血噴き墜ちていった。

敵が細かな肉片に変わり落ちていく。
敵の死亡が確認できた、目をもう片方に向けた。
すぐさま地上に降り周囲を確認した。幸いな事にそこは他より比較的戦闘行動が落ち着いていた。泥水の臭い匂いが鼻に付き、それ以上に臭ったのが血の匂いだった。
「小隊長っ！　アーリンゲが……」
あまりにも見るに耐えなかった。
息はしていた。――していたがどうして生きているのか不思議なくらいに人体の破損が酷すぎた。
腰から入った弾丸が、体のどこかに跳弾し、首筋から飛び出て行ったようだ。
生々しい肉の色、左腕が千切れと飛び溢れ出る途轍もない量の血液。そしてその状況でギリギリ息をしているアーリンゲ伍長はブクブクと血の泡を吹いていた。
応急処置が適応されているレベルを超えていた。いっそのこと墜落と同時に首の骨を折れば不運な戦闘事故として処理できたかもしれない。
「ここじゃ何も出来ない。処置はメンゲルベルク大尉に任す」
止血の為の術式をアーリンゲ伍長に施し、出来うる限り傷口を水で洗う。
「C（コマンドポスト）P、こちら第三小隊。不慮の負傷者（キャズアルティー）」
『C（コマンドポスト）P了解。すぐに――ちょっとッ！』
通信に僅かな混乱が見られ、その声が入り込んでくる。
『ヴォーヴェライトだ。不慮の負傷者（キャズアルティー）の状況はどういった感じだ』
「ジーヴァス大尉、腰より弾丸が入り首より抜けています。止血処理はしましたが裂傷が酷く、呼吸も弱まりつつあります」
『了解した。直ちに戻ってきたまえ、施術の準備を始める』
「――了解（コピー）」
私は少々驚いた。
ヴォーヴェライトがわざわざ通信機を毟り取ってまで耳を傾けているとは、あのテントより出ているとは夢にも思わなかった。

解剖に夢中な心理医学者程度だった評価が、私の中で献身的で有能な医者にはランクが上がった。
隊員の一人がアーリンゲ伍長を担ぎ、セレブリャコーフ伍長が千切れた左腕を持ち、私が周囲を警戒しながら、直ちに戻った。
テント群の中で白色の小さな粒が幾つも犇きあっているのが見える。
ヴォーヴェライトたちだった。脇にはストレッチャーを持った医学生たちが居り、その一歩前にヨーゼフ博士が両手に点滴を持っていた。
私たちが地上に降り次第、彼らはアーリンゲ伍長をストレッチャーに乗せて気道の確認を初め、残っている右腕の静脈に注射針を打ち点滴にそのチューブを繋ぐ。
「こりゃ酷いな。生きているのが不思議なくらいだ」
ヴォーヴェライトは半笑いで傷口の状態を確認していた。
千切れた左腕の具合は既に駄目であると判断したのか、医大生の一人に渡す。
「ヴォーヴェライト……彼ならいいじゃないか？　同意書にも署名している」
ヨーゼフ博士はいつもの柔らかな笑みではなく真剣な顔でヴォーヴェライトに話す。
「成分解析がまだだ、人体細胞にどういった反応を示すかわからないぞ」
「……オマキザルでは成功している。そろそろ始めてもいいじゃないのか？」
「そうだな――まずは４００ミリからから始めよう、医療テントに運ぶぞ！」
ヴォーヴェライトの表情からも徐々に笑顔が消えていた。
彼らはアーリンゲ伍長を担ぎ、医療テントのなかに消えていった。

微かな異変

小さく息を吐き、膨大な過去の記憶よりたった一人の男児のみを思い出すと言うのも困難な事であった。

あれとの、ヴォーヴェライトとの仕事上の関わりはほんの数回程度だった。

その数回の印象は強烈なものであったが、時の流れによりやはり色褪せてくる。

マグカップを手に取り、冷めたコーヒーを飲む。

やけに甘く牛乳の匂いが強調された風味。ざらざらとしたフィルターを抜けてきた珈琲豆の粕が舌に触る。

「ヴィーシャめ……私がこの淹れかたが嫌いなのは知っているだろう」

ひとりごちる私はマグカップを置く。

黄橡色の珈琲がくるくると渦を描き回っていた。

この珈琲の淹れ方は、東南圏のある地方特有淹れ方だった。

カップの底をコンデンスミルクで満たし珈琲を注ぐ。後は混ぜる。

甘い、とても甘い。私はこの珈琲が嫌いだった。

ヴィーシャは気に入っているようだが、二度と私にこれを出すなと言い聞かせなければ成らない。

これもヴォーヴェライトの影響か。ヴィーシャは彼の入れるこれが好きで足繁く通っていた事を覚えている。

これを飲みながら何気ない会話をしていたのだろう。一介の兵士と、理智の怪物が楽しげに笑い合いながら。身震いがしてしまうくらい馬鹿馬鹿しい。

ヴォーヴェライトが行ったことは許される事ではない。

私はそれを証明する証人として、国際医師裁判に提出する書類を書いているのだ。

茶封筒の中に入った書類を取り出す。悪ふざけのように丸秘と赤いスタンプがでかでかと押された極秘資料。懇意にしている技師から取り寄せたものだ。

その中には一人の死亡報告書と、それにいたる経過観察書が同封されていた。
――『Ａ（アーリンゲ）・Ｄ（ディーステル）死亡経過報告書』
狂科学者（ヴォーヴェライト）の最初の被害者にして、狂科学（マッドサイエンス）の象徴的名詞。
私と奴（ターニャヴォーヴェライト）を繋ぎ合せた楔の名前でもあった。
タイプライターに再度向き合い、キーを叩く。
ライン戦線に配属されて長く小隊の指揮を取り、私に登録魔導師（ネーム・ド）としての名前「ラインの悪魔」と自身の耳に届くほど活躍をしていた。
これは軍大学に入る約一ヶ月前の話だ。

「各員、状況報告」
私はインカムに問いかけ部下の状態を確認した。
地上では榴弾が炸裂し、空にまでその振動が空気を通し内蔵を揺さぶった。
今日日は対空攻撃の手は薄く航空魔導師との遭遇は無かった事を記憶している。
いつもの通り、空を飛び支援の無線が入れば尽かさず向かい敵を射殺する。簡単な仕事だ。刺激の少ない機械的な作業ほど慣れが恐ろしいものはない。
刺激の少ない仕事の中で、刺激的過ぎた出来事と言えば目の前にいる『それ』だった。
『無傷（ノンダメージ）です。今回は腕が飛ばずに済みましたよ小隊長』
活気に溢れた声で答える隊員がいて、その言葉にセレブリャコーフ伍長ともう一人が笑い声を上げた。
目をやった私はそれが恥ずかしそうに『左腕』で頭を掻いていた。
千切れ飛んだ筈の『左腕』。健常者の如く、アーリンゲ伍長は前線に復帰していた。
伍長が被弾してだいたい二週間程だ。
あまりにも早すぎる復帰に私は驚くよりも先に正気を疑った。
アーリンゲ伍長を前線に戻す判断を下したジーヴァス大尉を。

ジーヴァス大尉は伍長に施術し成功を収めたと興奮気味に触れ回り、フランソワの魔導師が詰め込まれた死体袋を抱き枕代わりに寝ていたのを見たのが最後だった。

どういう治療をしたのか一切わからない。

あちらの知識がある私だからこそ、これがあまりにも異常事態であることはひと目で判るのだ。一時期反響を呼んだ指を再生させる粉があるというが、これはいくらなんでも規模が違いすぎる。

設備も、環境も、状態も、人員も、何もかもが足りていないこのライン戦線で。

――腕を繋ぎ直すなど。

馬鹿げている。これこそ神の加護が必要だろう。

私は存在Xの干渉と疑いを強めていた。だがあれがアーリンゲ伍長に祝福を授けるとはどうにも思えない。

彼は献身的な教徒であり毎日祈りを捧げている事は知ってはいる。知ってはいるがそんな人間この世にゴマンといるだろう、この生きがたい世情では尚の事。

なにより存在Xがそこまで慈悲深いとは思えない。信仰心がないという理由だけで私を女人の体に生まれ変わらせる「神様」だ。

(なぜ女性に、せめて男児だろう。存在Xめッ!)

心裡で私は毒を吐くが、だとしても部下が復帰するのは喜ばしい事だ。

笑えるときに笑うのは精神的にもいいこと。私も肩をすくめて笑った。

このときはまだ私は知らなかった。

彼が後に登録魔導師(ネームド)「狂戦士(ベルセルク)」と呼ばれるとは。

「大尉は定期的に礼拝を?」

「時間と気が向いたらだ。戦場は検体が多くて時間を作れないからねえ」

週末に大テントで行われる礼拝(ミサ)で偶然、ジーヴァス大尉と出会っ

た。
　ジーヴァス大尉の白衣は茶色に近く変色した血の跡が疎らに着いており、見た目は医者と言うより油仕事後の機械技師のような様相で祈りを捧げていた。
　見た目は小さな子供が二人並んで祈りを捧げていた。手を組み眼を閉じ神という偶像に妄信する。滑稽な行為で、私のように存在Xの実在とその仕打ちに愚弄するために通うものも少ないだろう。
　ジーヴァス大尉はただ単に神への忠誠からか、それとも日常行為としてか。その祈りが存在Xの自己満足のために行われているとは知りはしないだろう。
　司祭者のありがたい人生論を聞き最後には神への賛美に至る。毎度の事だ。
　恨みの念を届ける為に来ている私には司祭者の言葉は不必要な言葉だ。だが、こうしていて途中退席するのも失礼だ。大人しく訊くに限るが。
「神とは身勝手だと思わないかね」
　小さな声でジーヴァス大尉は私に問いかけてきた。
「それはどういうことですか？」
「こんなにぐちゃぐちゃになるまでほったらかす神を君はどう思う」
「どうと言われましても。私は信じることが救いと教わりました」
「献身的だ。よい心がけだがね、私はどうしても天上でふんぞり返った彼が疑問でならないんだよ」
　司祭者の話は終わり、ミサに参加していた者たちが大テントより徐々に出て行く。
　言葉の意図を読み取れず混乱してしまう。ジーヴァス大尉は立ち上がり、神の像の元に行き見上げた。
「私は時々思うのだよ。神とは我々となんら変わりない存在なのではと」
「は……神が我々と同列といいたいので？」
　ジーヴァス大尉は今頃になって私を見て気まずそうに頬をかく。
「すまない。君は宗教を持っていたんだった」

「いえ、構いません。私は寛容なほうです」
「よかった。こういう話をすると気を悪くする人間もいる」
だとしても手遅れだろう。神が人間と同列など、あの司祭者が聞いたら怒っているだろう。気づけば大テントには私とジーヴァス大尉だけになっていた。
私は訊いてみる。
「どういう理由で神が人間と同列なのです？」
「直感、に近いのだがね。よくある物事を極めたものを人は『神』と讃えたがるだろう。なら私が『人間』を卵子と精子から生み出す方法以外で生み出し、生命を完全に理解すればそれは神ではないのかとね」
「人を生み出したから神とは安直過ぎます」
「たしかにね。神とはどういった存在なのだろうね、私たちや世界を生み出してなにをしたいのか。気になるんだよ」
「信仰がほしいのでしょう」
「創造物からの賛美を欲するのかい神は。なら何故我々を賛美の言葉だけを言う生物にしなかった」
「それは神だけが知るところでしょう」
「神と言う存在を理解するのに逃げてはいけないよ、デクレチャフ少尉。私たちは神を正しく理解する必要がある」
「なぜ？」
「なぜか……こうは思わないか？　神は地を創り空を創り、生物を作ったにも拘らず何故人間だけにこうも複雑な思考を与えたのだ？
エデンの林檎を口にしたからか？　知識と言う物を発生させる供物がこの世存在すると」
「宗教論がしたいので？」
「いいや、人間と言う生物の探求だよ。獣とは一線を画す生物を私はすべてを知りたい。不思議じゃないかい、なぜ人と人ではなにが違う。鯨と我々はどこが違う。人同士は００．１％しか変わりはしないのに００．１％が個になり得る。チンパンジーは手話を理解するだけの知能を有し会話が成立するのに、どうして我々が高位に立っていると考えれるのか」

「人と言う形でしょう。より合理的に産まれている。手を使って頭を使って物を作っている」
「そうか。なら、神と我々はどう違う。我々は神と同様の姿をしているのになにが違うのだ」
「奇跡、でしょう。我々は奇跡を使えない」
　くだらない問答だ。答えは簡潔である。
　我々は神ではないし、神の創造物ではないはずだ。
　私は無神論者であの存在Xが我々の創造者とは考えない。我々は進化の中から生じたのだ。自然淘汰の波から適応し得たからこそ我々で在りえている。
　ただ、決定的に違うのは能力だろう。
　あの奇跡のような体験だけは我々には――
「なら、奇跡を使えるようになれば『神』となるのかい？　永遠を得れば神となりえるのかい？」
「私にお聞きにならなくても、理解はしているはずです」
「我々は神ではない、人間である。その通り、我々は人間でありその矜持（プライド）がある」
「分かっているではないですか」
「神に祈る者、敬う者、知らぬ者、罵る者が勝者になった例はある。だがしかし、神に『縋る』者は常に敗者。だから私たちは祈り、敬い、罵ることが勝利への道なのだろう」
「この戦争のですか？」
　ジーヴァス大尉は私を見てにっこりと笑った。
「いいや。世界に、私は世間に打ち勝ちたい。より人間を理解するためにね」
　ゆっくりとした足取りでテントを出たジーヴァス大尉を追う。
　その後姿は何かうずうずしている様子であった。
　神を理解する。到底出来る事ではないだろう。
　それこそ即身仏になるだけの覚悟と苦行を要するに違いない。神を、存在Xを理解するなど――理解は出来そうな気がする。
　この人生と言う仕打ちをするような奴だ。稚拙で高慢な態度が頭

に浮かぶ。
存在Xに厄災あれ。この人生始まって呪いのように私は唱え続けるだろう。
「一つお聞きしたいのですが？」
「なんだい？　私が答えられる範囲でなら」
「アーリンゲ伍長にはどういった処置を」
振り向き立ち止まったジーヴァス大尉は熟考している様子であった。
「復帰が早すぎるって？　確かに二週間は早すぎるかな？」
「どうして疑問なのです。伍長の治療を行ったのは彼方だ」
どう答えるべきかと言った様子で頬を掻く。
ジーヴァス大尉は暫時考えた後、こう答えた。
「革新的神経系及び筋肉接合治療。これ以上は答えられないな、個人情報的にも。――機密的にも」
悪戯が成功したと喜んでいる表情でジーヴァス大尉は医療テントに戻っていった。

その夜、私とツーマンセルを組んでいたセレブリャコーフ伍長より相談があった。
別段深刻な問題ではないと言う。ただ隊員の一人、アーリンゲ伍長の様子が変だというのだ。
「どういった感じに変なのだ」と私は聞いた。「彼は病み上がりだ、どういった変化が会ってもおかしくはない。言ってみろ」
伍長は少々言いにくそうにしていたが、徐々に話し出した。
「性格が、変に明るくなったと申しますか。それに今まで言わなかった神に関する縁起でもない冗談を……」
「ほう、どんな不謹慎な冗談を言った？」
伍長は周囲の眼を気にしながら恐る恐る言った。
「小隊の二人と食事をした時、アーリンゲが物凄い勢いで食べてたんです。その食べかたが汚いって別の隊の人に言われて彼が――ユー

デア人は神の子を裏切って食べたのに食いかたを気にするんだな、て」
少々仰天してしまう。
本当に不謹慎な冗談（ブラックジョーク）であった為だ。
ユーデア教徒に向かって吐いたのなら喧嘩になること間違いなしだ。
帝国には二つの宗教が存在している。私も所属するイースター教とユーデア教の二つだ。この二つは元を辿れば一つの教徒であったそうだが、どこの世界でもありえることが起こっていた。
イエス・キリストがユダヤ教徒に裏切られ磔にされたように、イースター教の崇拝する神の子がユーデア教徒に裏切られ、「食べられた（カニバリズム）」と言う話があるのだ。
宗教に関しての黒い冗談（ブラックジョーク）はどこの時代、どこの世界でも大問題に発展する。
イルラム教徒を欺き豚肉を食わせれば戦争に発展すると言われる位に、宗教的繊細な問題をアーリンゲ伍長はほじくっていたのだ。
「その隊員はユーデアの？　喧嘩に発展したのか？」
「いえ、怒ってはいましたが。気分を害したと言ってどこかに」
「そうか……」
セレブリャコーフ伍長の言う通り、アーリンゲ伍長は『変わって』いた。
私もミサに参加していて彼がイースターの熱心な教徒であることは知っている。
知っているが、こういった問題を口にするような人間でない事も知っている。
明らかに考え方が『変貌』している。
「わかった。私のほうからアーリンゲ伍長に言っておく」
「よろしくお願いします。少尉殿」
安心した様子のセレブリャコーフ伍長であったが、私の中では何かが引っかかっていた。底知れない、原因のない不安感のようなものが芽吹いていた。